

たかがハサミ、されど・・・

私が学校で勤務していた時の事、ある女の子が息せき切って「先生、ハサミ貸して！」と廊下を歩いている私に声をかけてきました。急いでいた私は、ハサミぐらい他の先生に借りられるだろうと思い「先生はドラえもんじゃないから今すぐには出てこないよ」と軽く返事をして通り過ぎてから、ふと振り返るとその子が首をうなだれて寂しそうな表情をして立っていました。私は「しまった！」と思い、すぐにとって返してハサミを用意したのですが、なぜその時ちゃんと話を聞いてあげなかったのかと後悔しました。普段おとなしく自分から話してくる事がめったにないその子が話しかけてくれたのです。私にとっては「たかがハサミ」でも、その時のその子にとっては高い壁を乗り越えるようなものだったのだと思います。

私達が「たかがそんなこと」「できてあたりまえ」と思っている事でも、子どもにとって心のエネルギーをたくさん使う大きな壁であったり不安であったりする場合もあるようです。子どもたちからのそんなサインを私達教師がしっかり受け止め、子どもたちに寄り添い、「しっかり伝えられた」「分かってもらえた」「自分でできた」と実感できるよう支えたいものです。

(篠原)

「自分で決める」ということ

～適応指導教室「そだち」での援助的かわり～

適応指導教室「そだち」は、主として心理的に不安定で家庭以外に居場所を失っている金沢市内の不登校児童生徒のための教室です。安心できる居場所の中で自分のペースを見つげられるように援助を続けています。

「そだち」に通室している子どもたちの中には、他の人から自己肯定感を傷つけられ、更には自分自身を否定し傷つけている子どもたちも少なくありません。「何をしたいかわからない」……自己の内から崩された自己肯定感、無力感を強め、子どもの「自分で決めていく力」をむしばんでいるようにも見受けられます。

そこでスタッフは、子どもの気持ちに寄り添い信頼関係を育てながら、子どもの主体性を尊重し、自己決定の機会を与えるよう心がけています。子どもは自分の気持ちを大切にされていることで安心し、自分の存在が周囲の人とのかかわりの中で認められていることを少しずつ確認していくのです。決して短い時間ではありませんが、子どもは少しずつ自己肯定感を増し、「今の自分でいいんだ」という自信をもちます。そして、心の中のエネルギーが満ちたとき、自分を成長させることの

できる積極的な存在となっていくようです。また、自己肯定感をもてない子どもの中には、認められない行動をとる子がいます。私たちは、彼らの心を理解するよう努めた上で、気持ちは認めても、行為は認められないことを断固とした態度で伝え、もしその行為をやめたときには、子どもが責任ある行動をとれたことを評価しその努力をともに喜ぶようにかかわっています。

大人は「力になってやらない」と思うあまり「よかれと思って」先回りして子どもに代わって判断や選択をすることがありますが、このような姿勢を続けると、子どもの自分で決める力を奪い、子どもを受け身的にしていってしまいます。自分で選び、自分で決め、自分でその結果に責任をもつ——その経験を通して、自己、そして、他者への信頼感を豊かに広げていけるよう願いたいものです。

(宮崎)



(発行者) 金沢市総合教育相談センター
 所長 澤井 弘
 〒920-0852 金沢市此花町2番7号
 TEL(224)0874 FAX(263)7830
 kyouiku_so@city.kanazawa.ishikawa.jp

精神科医相談を御利用ください。

精神科医に直接会って相談できます。先生方で対応に不安を感じるケースがありましたら、どうぞ金沢市総合教育相談センターへご連絡ください(あくまで先生方のための相談機会です。保護者の方が直接相談するものではありませんのでご注意ください)。

精神科医の適切なアドバイスにより、問題点が整理され、取り組みの今後の方向が見えてきます。

＜今年度の相談例＞

- 授業中じっとしてられず、クラスからの飛び出しが多い
- 不登校が長びいているが、最近自分の部屋から独り言が聞こえてくるようになった

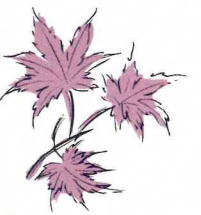
(上農)



金沢城・五十間長屋

平成14年9月30日発行

お礼参り



担当所長 澤田 秀樹

子どもの言い分

「30歳まで生きればそんでいいんや」

「体に悪いもんなら、なんで売っとるんや」

どう見ても大人にみえない子どもたちが、堂々と煙草を吹かしているのを見かけ、声をかけたときにこんな言葉が返ってくる場合があります。

親の言い分

「今の子どもは煙草くらいみんな吸うとる、うちの子どもにだけ言うても無理や」

「隠れて吸って火事になったらよわるし、うちの中では吸わせとるんや」

どう考えても子どもをしつけることができない親の屁理屈にしか聞こえないのですが、家庭連絡で親の方から立派な教育方針(?)を披露されることがあります。

補導員の言い分

放任することと自主性を錯覚して、家の中に灰皿まで準備し煙草を吸わせることは、人間として大事な“してはいけないこと、がまんすること”についての理解を子どもに誤らせ、徐々に非行範囲を拡大していくことにつながります。

親が子どもを叱ることを放棄したとき、親としての存在意義はなくなるのではないのでしょうか。

子どもの成長にとって上手に叱ることはとても

大切なことです。

- ・タイミングを外さず理由を明確に叱る。
- ・他の兄弟姉妹と比較して叱らない。
- ・叱りっぱなしにしない。

などがそのポイントです。

また子どもを褒めることもそれ以上に大事なことです。今年の全国非行防止大会北海道大会の開会式でご挨拶された佐々木副知事は、「子育ての基本は“みほこさん”です」とおっしゃいました。

認める・褒める・肯定する・賛成するの頭文字を指しておっしゃったことです。子育てに限らず対人関係全般に通ずるものと感じました。

お礼参り

今年の春、中学校を卒業した二人の子どもが、私たちのところへ挨拶に来てくれました。険しい表情は消え、これまで見せてくれなかったいい顔をしていました。彼らの来所を全く予期していなかったことと、きちんと挨拶ができるようになった子どもが二人もできたことをとてもうれしく思いました。

来年はもっとたくさんのお礼参りをうけることができることを楽しみに、私たちは今日も歩き続けています。

いじっかしいげんて!

真夏の厳しい日差しの中、堅町通りを歩いていますと、前から男子高校生が自転車の二人乗りで通り過ぎようとしています。「補導員だけど、二人乗りは危険だし、交通違反だからすぐ降りなさい」と声をかけますと、すかさず「すみません」と後ろの高校生が飛び降りたので、微笑みながら「気をつけなさいね」と見送りました。自転車の二人乗りは交通違反であることは誰でも知っています。特に体力的に二人乗りが可能な中・高校生に違反が多いのも事実です。堅町通りも中程になったとき、後方から私服ですが女子高校生風の自転車の二人乗りがかなりのスピードで追い越して行こうとしましたので、すかさずやや大きめの声で「二人乗りは危ないからすぐ降りなさい!」と声をかけました。咄嗟のことであり「補導員」という身分を名乗る余裕もなかったのですが、彼女らは降りる様子もなく、黙殺するようにスピードを落とさず離れて行きました。再度「降りなさい!」と声をかけた途端、後ろの女の子の発した声に唖然としました。「いじっかしいげんて!」。男子高校生と彼女たちとの違い。巡視活動中、このような光景に遭遇するのは特に珍しいことではありません。喫煙行為にもこのような差がよく見られます。彼女たちもいずれは将来母親となり、子育てに苦労する時が来るのだらうなと思いつつ、しかしそんなに都合良く変身できるのかなと不安を抱き、去って行く彼女たちを見つめていました。このような少年たちはほんの一部ですが、その少年たちが早く物事の善悪の判断が出来るようになるための補導員の「愛の一声」であることを再認識し、これらの積み重ねが少年たちの健全育成のささやかな助けになっているんだと自負しつつ、時折店舗から流れ出るクーラーの冷気に萎える気持ちを奮い立たせて堅町通りを後にし、片町・香林坊方面へと足を向けたある日の出来事でした。(補導員A)

タバコと彼女

最近、「喫煙行為」で補導する少年たちの「タバコ」を吸うきっかけの多くは、「友人が吸っているから自分も吸う」という安易なことから始まっているようです。法律的にも、身体的にも悪いという自覚が無いように思われます。

この間、駅構内にある階段で高1男子を喫煙で補導しましたが、この少年も、高校に入学してからの友人関係から喫煙するようになったと言うのです。「喫煙はいけないことだから絶対に止めなさい」と諭し別れました。数日後、同じ場所で「おっちゃん! 僕、タバコ止めたよ」と笑顔であの少年が声をかけてきました。話を聞くと、彼女ができて、その彼女から「タバコを止めるように」と言われたからだそうです。愛は強しというが、彼女のためにタバコを止める決心をした少年の言を信じ、温かく見守っていきたいと思います。(補導員B)

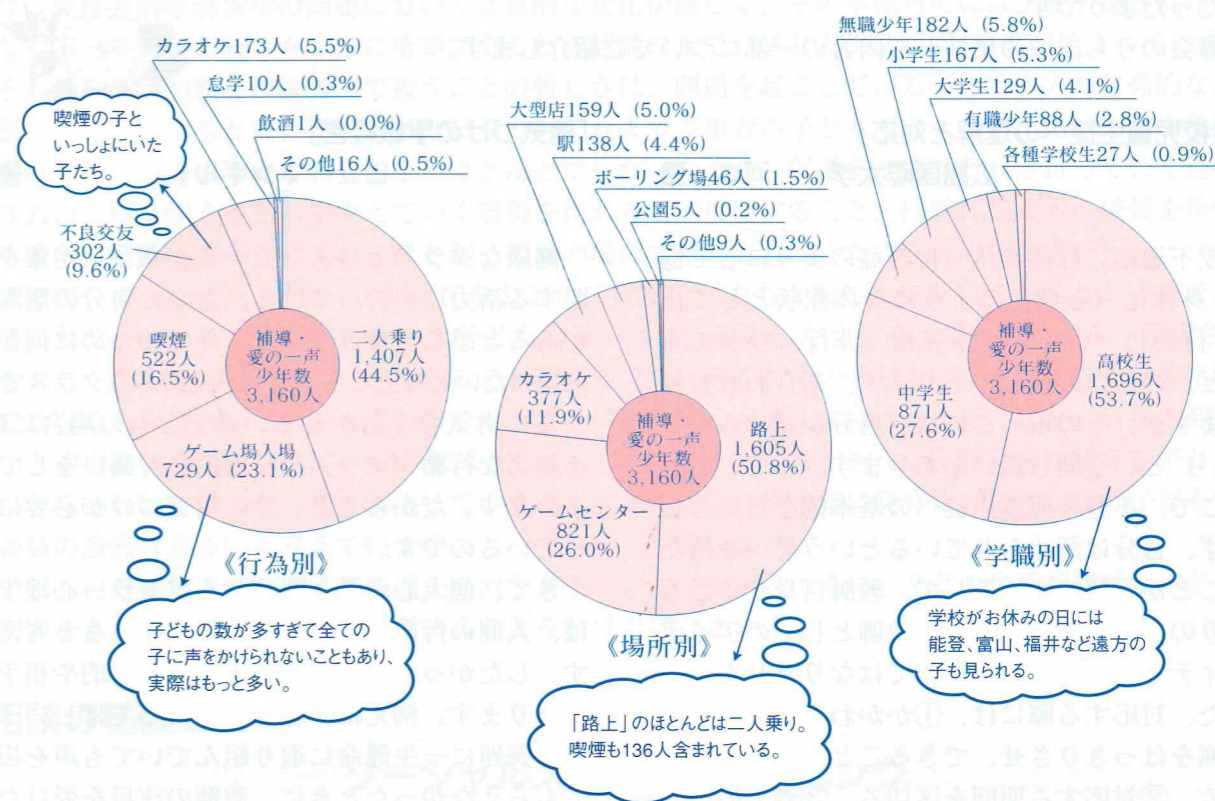
自らプータロウと名乗る少年たち

過日は、茶髪、金髪、濃い化粧、体をほとんど露出した服装などで町は賑わっていましたが、そのような少年たちも休みが終われば制服を着て学校へ戻って行きます。でも進学しなかった子、高校中退した子、怠学中の少年たちが相変わらず多いのには驚かされます。この少年たちには時期が来ても戻って行くところはありません。また仕事も簡単には見つかりません。15~18歳、私たちは毎日この年頃の少年たちとかかわっています。生徒・学生は学校や先生がブレーキになりますが、この少年たちには何も怖いものが無いのです。私たちには、誰もが相手にしなくなりがちなの少年たちが一番気になるのです。

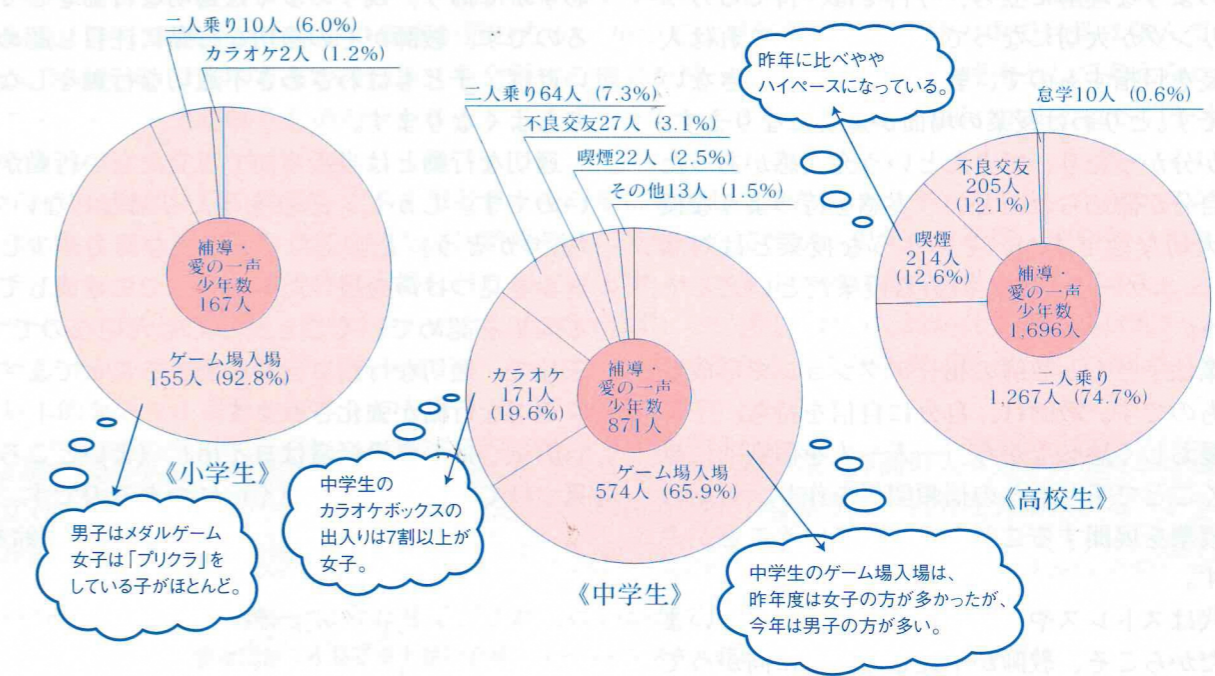
心を少し開いてくれる子もいますが、ほとんど投げやりな態度です。行ってもいない学校の制服などを着ているのを見かけると、やはり学校へ行きたいのか、単なるコスチュームなのか考えてしまいます。一人一人が親や大人と向き合って、なんとか自分たちの進む道を見つけて欲しい、親も諦めないでいて欲しいと願わずにはられません。(補導員C)

平成14年1月~8月の補導・「愛の一声」状況

(1) 補導・「愛の一声」少年の行為別・場所別・学職別の概況



(2) 小・中・高校生の行為別状況



この夏の研修会より

夏期休業期間中に7講座で延べ11日の教育相談関連の研修会が行われました。どの講座でも熱心に耳を傾けていらっしゃる先生方の姿がとても印象的でした。「興味深い話だった」「これからの実践に是非活用したい」等の感想が寄せられました。また、演習やグループ討議などの受講形態についても概ね好評だったようです。

研修会のうち二つの講演から内容の一部についてご紹介します。



「不登校児童生徒への理解と対応」

広島国際大学 河本 肇

学校不適応には体験化（神経症のように心で悩む）、身体化（心身症のように身体症状として出る）、行動化（いじめ、不登校、非行、ひきこもりなど）の3つの方向があります。あらわれ方は違いますが、その根っこには『自分が認められていない』という同じ思いがあります。

そこで、不登校児童生徒への基本的な対応としてまず、自分は認められているという思いを持たせることが大切です。そして、教師自身が子どもや周りの人に心を開くことや教師としてのアイデンティティを持つことを忘れてはなりません。

また、対応する際には、①かかわる人たちの守備範囲をはっきりさせ、できることは何かを明確にする ②対応する期間を区切る ③過去のことではなく、今そしてこれから何ができるかという視点で考える ④子どものペースに委ねる等の点に留意し、担任だけが問題を抱え込むことがないようにしたいものです。

このような理解に立ち、今日では、育てるカウンセリングが大切になってきています。これは人間成長を目指すもので、教育の中でしかできないものです。とりわけ授業の場面が重要になります。勉強が分かったり、できたという充実感があつたり、自分が認められたという実感を持つような授業が大切なのですが、そのような授業とは対話（コミュニケーション）のある授業だといえるでしょう。

授業は子どもと教師の相互アクションで形成されるものです。教師は、自分に自信を持ち、子どもを愛おしく感じながら、一人一人を個別に見ていくことで子どもとの信頼関係を作り、対話のある授業を展開することを心がけていくことが大切です。

現代はストレスや不安の多い時代になっています。だからこそ、教師が率先して明日に向かって夢を語ってほしいと思います。

「勇気づけの学級経営」

ヒューマンギルド 岩井 俊憲

健康なクラスとは、一人一人が勇気（困難を克服する活力）を持っていて、さらに自分の居場所があると感じ、仲間を信頼し仲間のために何か役に立ちたいと考えるつながり感覚のあるクラスです。

逆に勇気をくじかれている子どもの場合には、不適切な行動（クラスに破壊的な行動）をしてしまいます。だからこそ、今、勇気づけが必要になっているのです。

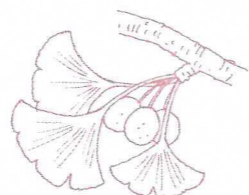
さて、個人心理学と呼ばれるアドラー心理学では、人間の行動には目的と相手役があると考えます。したがって、不適切な行動にも目的や相手役があります。例えば、教師に注目してほしい子どもが課題に一生懸命に取り組んでいても声を掛けてもらえなかったときに、教師の注目を受けたいという目的のために口笛を吹くという不適切な行動をするというようなことです。

教師は不適切な行動ばかりに注目してしまいがちですが、不適切な行動は全体の行動からするとわずかであり、残りの多くは適切な行動をしているのです。教師がその適切な行動に注目し認めていけば、子どもはわざわざ不適切な行動をしなくてもよくなります。

適切な行動とは当たり前で目立たない行動が多いのです。しかし、それを当たり前としないで、「ありがとう」と伝えたり、地道な努力や少しの進歩を見つけ声を掛けたり、今すでに達成している成果を認めていくことがとても大切なことです。そして、適切な行動に言葉を掛けることでますます適切な行動が強化されます。

勇気づけの学級経営はヨイ出し（よいところを見つけて言葉に出していく）につきますのです。

（鈴木）



【子ども生活相談から】

「育てなおし」から「育ちなおし」へ

今年度から、子ども生活相談は相談員を2名増員し8名体制で取り組んでいます。これにより、金沢市内の全中学校に対しほぼ週1回の訪問が可能になり、より綿密な先生方との連携のもと充実した支援ができるようになりました。

今、反社会的な青少年の問題においては質的な変化が激しく、その早期対応には学校や保護者だけではなく第三者のかかわりも非常に重要であるとの認識の上で、「子ども生活相談」事業が始まっています。

そもそも非行問題を相談機関で扱うことの難しさは、問題を起こしている子ども本人の自発的な来所が難しいことにあると思います。したがって、これまで当事者の子ども本人よりも、それを支える保護者への援助を中心に考えられることがほとんどでした。つまり、保護者が問題と向き合っていく過程につきあい、粘り強く子どもを支えていく態勢を作れるよう援助すること、同時に子どもの成長を待つ気持ちの余裕を持てるように支えることが、相談の場面で求められていたように思います。

「指導」ではなく「支援」に、「育てなおし」ではなく「育ちなおし」に転換することが必要であると言われているように、本当の意味で子ども自身が問題行動をしなくなるには、大人から「理解され、支えられ、そして安心できる」と感じる必要があります。そのため子どもへのかかわりを学校生活だけではなくそれ以外の生活の場面の中でも、さりげなく且つ意図的に持つことで、子ども自身の発達や気づきが促されると信じます。その結果として、「それまでの問題とされた行動の持つ意味を子ども自身がとらえなおし、別な方法で解決していこう」とする過程に寄り添い見守る存在としての子ども生活相談員の意義は大きいと考えています。

子ども自身が自分の問題と真正面から向き合うことにつながるように、子ども生活相談員は子どもの感情面をきちんと取り扱い、受けとめることを続けたいと思います。（竹内）

【相談の基礎Ⅱ】

ソーシャルスキル・トレーニング

前回の相談の基礎Ⅰでは予防・開発的な教育相談の手法として「構成的グループ・エンカウンター」を紹介しました。今回は、「ソーシャルスキル・トレーニング」です。

先生方から寄せられる相談の中に「友だちと遊べずに孤立しがちな子どもがいる」「友だち同士で遊び始めるとすぐケンカになる」等々、社会性に関するものが増えてきたように思われます。時代の急激な進展に伴う地域社会や家庭の変容が進むなか、かつては異年齢の遊び集団の中で自然に学んできた「社会的な技能」「人づきあいの技術」を会得する機会が減っていることがその理由として考えられますが、その不足を補うためのソーシャルスキル・トレーニング（social skills training:SST）が今、注目されています。

精神科の領域で社会復帰をめざす患者さんを対象に発展してきたソーシャルスキル・トレーニングが教育に取り入れられるようになったのは特殊教育の分野からですが、現在では予防・開発的な教育相談の手法として、広く義務教育に浸透しはじめています。山本五十六の言葉にある「してみせて 言って聞かせて させてみて ほめてやらねば 人は動かす」のうち、「言って聞かせる」ことは十分に足りている今の子どもたちに「してみせて」、その後「させてみる」ことを構成原理として、以下のような基本的なスキル獲得のメニューも用意されています。

あいさつ・自己紹介・上手な聴き方・質問する・仲間の誘い方・仲間の入り方・あたたかい言葉かけ・気持ちを分かって働きかける・やさしい頼み方・上手な断り方・自分を大切にする・トラブルの解決策を考える

自分たちのクラスの様子に合わせて試されてはいかがですか。

（上農）

参考文献 小林正幸・相川充編：ソーシャルスキル教育で子どもが変わる、図書文化
渡辺弥生：ソーシャルスキル・トレーニング、日本文化科学社